

2. 商学研究科

| | | | |
|-----|-----------------|-----------|-------|
| I | 商学研究科の教育目的と特徴 | ・ ・ ・ ・ ・ | 2 - 2 |
| II | 「教育の水準」の分析・判定 | ・ ・ ・ ・ ・ | 2 - 3 |
| | 分析項目 I 教育活動の状況 | ・ ・ ・ ・ ・ | 2 - 3 |
| | 分析項目 II 教育成果の状況 | ・ ・ ・ ・ ・ | 2 - 5 |
| III | 「質の向上度」の分析 | ・ ・ ・ ・ ・ | 2 - 8 |

I 商学研究科の教育目的と特徴

1 研究科の教育目的

本研究科には、修学期間が原則として2年間の経営学修士(MBA)コースと、5年間の研究者養成コースがある。前者は、我が国の実業界が期待している専門的能力を有する実務家の養成を、後者は、我が国の学界が期待している研究者の養成を、それぞれ目的としている。

経営学修士コースは、基礎理論の体系を重点的に教育することにより、現代企業経営に対する洞察力と論理的思考力、オリジナルな問題設定能力を備えた実務家を養成することを目的としている。

研究者養成コース(修士課程・博士後期課程)は、広い視野に立って精深な学識を養い、専攻分野における研究及び応用能力を培うことを目的としている。具体的には、経営、マーケティング、会計、金融並びにそれらに関連する分野を専門とする大学教員や、公的研究機関・民間シンクタンク等で研究員となる人材を養成することを目的としている。

2 研究科の起源とこれまでの経緯

明治8年に設置された商法講習所を起源とする本学において、本研究科は、制度改革の一環として昭和28年に置かれ、修士課程及び博士後期課程が設置された。平成12年には大学院重点化がなされ、それまでの経営学専攻及び会計学専攻と商学専攻から、経営・会計専攻と市場・金融専攻に名称変更され、さらに平成19年には、経営・マーケティング専攻と会計・金融専攻に改組された。

また、平成8年に修士専修コースを併設し、大学院重点化された平成12年に、高度な専門的職業人の養成をミッションとする経営学修士コースへと発展させた。

3 教育目的の実現に向けての方策・特徴

経営学修士コースでは、上述の教育目的を実現するために、現実の経営者・教員との直接的対話を促す「創造的対話の場」を作り出すと同時に、徹底したコースワークや社会科学の古典の精読といった理論の体得も重視している。この方針に基づいたカリキュラムを構成することで、理論的志向性をベースとしながら、現実の世界に適用可能となる方策を立案するための思考力を形成することが、基本的な狙いである。

研究者養成コースでは、教育目的を実現するために、指導教授制(ゼミナール制)を堅持し、この指導の下で、時間を掛け、高度な研究能力を育成しようとしている。また、将来研究者として自立できる目安となる博士の学位取得のためには、指導教授制とは別に、論文指導委員会も設け、これに当たっている。

4 学部・修士5年一貫教育プログラム

本研究科には、上述のように、経営学修士コースと研究者養成コースという2つのコースがある。このような高度な専門知識と深い思考力を育成する大学院教育と、学部4年間との連携をさらに深め、高度の一貫性を持った教育プログラムとして、2つのコースに対してそれぞれ学部4年間と大学院修士課程1年間の計5年間で、学士並びに修士の両方の学位を取得することができる5年一貫教育プログラムを提供している。

[想定する関係者とその期待]

本研究科の想定する主たる関係者は、本研究科在籍学生、入学を目指す受験生、また本学修了生を雇用する大学等の研究教育機関・実業界・官界・非営利組織等である。本研究科への期待は、高度な専門的知識と技能を生かしてそれら様々な分野において中核的な役割を果たしうる人材を育成していくことにある。

II 「教育の水準」の分析・判定

分析項目 I 教育活動の状況

観点 教育実施体制

(観点に係る状況)

本研究科の組織は、経営・マーケティング専攻と会計・金融専攻の2つの専攻に分かれている。

教育課程としては、原則として2年の修学期間で行われるMBAを修得するための経営学修士コース(修士課程)と、5年の修学期間を要する研究者養成コース(修士課程・博士後期課程)という、2つのコースを設けている。

専任教員としては、63人(教授37人、准教授22人、講師4人)がそれぞれの専門領域における教育の中心を担っている。なお、専任教員のうち5人(教授1人、准教授2人、講師2人)は、英語による講義の拡充と研究のグローバル化推進を主たる目的として、平成24年度以降に順次採用された外国人教員である。

本研究科では、多様なニーズに応えるべく、入学者選抜方法の工夫を行ってきた。

第1に、収容定員を見直し、平成24年度に、1学年あたりの修士課程の定員を108人から118人に増員する一方で、1学年あたりの博士後期課程の定員を30人から22人に削減している。修士課程の定員増員分は経営学修士コースの増強に充てている。

第2に、各コースにおいて、入試制度の大幅な変革を実施した。

経営学修士コースでは、平成24年度入試から外国人留学生数の拡大を目的とする外国人特別選考を、平成25年度入試からは、企業等への勤務経験者をターゲットとする社会人特別選考、並びに本学学部出身者を対象とする内部選考を、経営学修士コースに開設した。この一連の変革により、経営学修士コースの入試種別は、既存の一般選考と企業派遣特別選考(秋期・春期)とあわせて合計6種類となり、志願者の属性にあわせてきめ細かい選考を行う体制をとっている。また、平成25年度からは、理系学部出身者を主たる対象として、一般選考で英語に代わって数学を選択できるように変更し、平成26年度入試からは、中国及びベトナム在住の志願者を対象として、北京とハノイにおいて、外国人特別選考の第2次試験を実施した。

研究者養成コースでは、主としてグローバル化への対応に向けて入試方法の変更を行い、修士課程では、平成26年度入試から5年一貫コースの出願資格に一定以上のTOEFLスコアを加えるとともに、内部選考を新たに開設した。また、博士後期課程では、英語のみによる受講を想定した志願者に向けて、外国人特別選考を平成26年度から実施している。

さらに、教育内容、教育方法の改善に向けた取組として、中期計画・中期目標ワーキング・グループ及び大学院教育委員会を中心として、受入から卒業までの期間での教育内容・教育方法の改善を恒常的に進めるとともに、研究科独自のFDを年度末に継続的に実施している。経営学修士コースでは、講義の最後に実施される授業アンケートとともに、独自の調査を実施して、学生からの要望を吸い上げて教育方法の改善につなげるとともに、平成26年度以降は入学直後に入試に関するアンケートを行い、入学試験に関して検討する際の参考としている。

また、商学部・商学研究科全体としてビジネススクールの国際認証機関であるAACSB(The Association to Advance Collegiate Schools of Business)の認証取得に向けた取組を始めている。

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由)

外国人留学生と社会人の受け入れ体制を充実させるため、平成24年度に実施した博士後期課程から修士課程への定員振替を基本とする経営学修士コースの拡充や、修士課程の定員拡大にあわせた、経営学修士コースを中心とする入試制度の大幅な変革を行った。

また、専任教員に関しても、外国人教員を順次採用し、社会的要請と合致した形で、多様性を高めるための施策を積極的に展開してきた。

これらのことから、期待される水準を上回っていると判断する。

観点 教育内容・方法

(観点に係る状況)

学位授与方針に基づき、コースごとに3つのポリシーを策定しており、そこに明記された基本方針を中軸として、教育課程を編成している。

経営学修士コースでは、標準的な知識を修得するための「コア科目」を選択必修科目として設定するとともに、より専門的な内容を学ぶために「選択科目」を設定している。また、現実の問題に対処するための思考力を育成する上で、「読む・書く・考える」というプロセスを集中的に繰り返すことを重視している。そのために、1年次の「古典講読」(15人程度)と2年次の「ワークショップ」(12人以下)を必修とするとともに、履修者が比較的多いコア科目を並行講義として設定したりすることで、最大40人程度に1クラスの受講者を抑え、教室での濃密な対話と、教員と学生並びに学生間での密接な相互作用を促進する場を提供している。

研究者養成コースでは、研究者になるために必要な基本的知識を体系的に学べるよう、専門性の高さに基づいて「専門基礎科目」と「専門科目」の2段階の講義を配置している。博士後期課程では、博士の学位取得に向けて、論文指導委員会を設け、博士2年次以降に2人の教員が指導に当たっている。

教育課程の実効性を高める主な取組として、次のことを実施している。

社会で求められる知識の高度化に対応するため、学部教育と大学院教育との連携をさらに深め一貫性をもたせるため、経営学修士コースと研究者養成コースの双方において、学部4年間と大学院修士課程1年間の計5年間で、学士並びに修士の両方の学位を取得することができる「5年一貫教育プログラム」を継続して実施している。

経営学修士コースでは、社会人経験者や企業等からの派遣者向けの入試により、近年は5割を超える学生が社会人経験者で占められている。そこで社会人学生の属性を勘案して、平成24年度からは並行講義の対象となるコア科目に社会人経験者専用のクラスを設定している。

また、経営学修士コースの外国人留学生に対しては、高度なビジネスに対応できる日本語能力を身につけるとともに、日本の文化や学びの場に円滑に適応することを主たる目的として、「留学生プログラム」を平成24年度に新設した。留学生プログラムでは、1年次の夏学期に週4日間のクラスで日本語を集中的に学習して、かつ1年次に3つの留学生プログラム専用である演習科目を受講していく。さらに、ベトナムからの留学生には、企業からの寄附により、2年間で最大500万円を給付する奨学金制度を平成26年度から開設している。

日本人学生に対しても、新たに採用した外国人教員による英語による講義を中心として、国際化を促進する機会を提供している。平成27年度には、経営学修士コースで英語による講義を7コマ(通常講義の約2割)開講した。研究者養成コースにおいても、一部の既存科目や演習において、外国人専任教員による講義を行っている。

以上に加えて、経営学修士コースでは、コース内に設定された「金融プログラム」と「ホスピタリティ・マネジメント・プログラム」において、海外研修プログラムを夏季休業中に継続して毎年実施している。

研究者養成コースでは、主として博士後期課程に在籍する学生を対象として、海外での研究発表への支援や海外派遣の機会を提供している。

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由)

コースごとの3つのポリシーに明示された基準を中軸として、段階的に学べる体系的なカリキュラムを継続的に編成してきたことに加えて、5年一貫教育プログラムの継続実施など社会からの要請をはじめとする環境の変化に積極的に対応した。

さらに、教育課程の実効性を高める主な取組として、経営学修士コースの「留学生プログラム」の新設やベトナムからの留学生への奨学金の新設、並行講義クラスを社会人経験者専用にしたことをはじめとして、学生の属性や社会からの要請にあわせたカリキュラムの変更を随時実施した。

これらのことから、期待される水準を上回っていると判断する。

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

観点 学業の成果

(観点に係る状況)

【修了・学位授与の状況】

過去5年間の修士課程修了者数、博士後期課程を修了し、博士号(課程博士)を取得した者の数は、それぞれ資料2-2-1のとおりである。

【研究業績等の状況】

研究者養成コースで最も重要と思われる成果は、博士後期課程における研究業績である。直近2年間における大学院生の研究業績は、資料2-2-2に示されるとおりである。大学院生による査読付英語論文が複数採択されている。

修士課程に関しては、研究者養成コースでは修士論文、経営学修士コースでは2年次に特定のワークショップに所属してワークショップ・レポートを提出することが、修了要件となっている。

なお、経営学修士コースにおいては、優秀で意欲がある学生は、「企業戦略プロジェクト」担当教員による指導の下で、『戦略ケースブック』(平成22年度修了者までは『企業戦略白書』、平成23~25年度修了者は『戦略分析ケースブック』)を分担執筆して、東洋経済新報社より毎年刊行している。また、国内のビジネススクールの学生が参加する「日本ビジネススクール・ケース・コンペティション(JBCC)」において、初参加であった平成25年度に経営学修士コースのチームが優勝し、平成26年度には準優勝、平成27年度には優勝するとともにイノベーション賞を同時受賞するなど、その分析力は他大学との比較でも、高く評価されている。

さらに、学業の成果を把握するための取組として、経営学修士コースを中心とする一定数以上の学生が受講する講義では、授業評価アンケートを実施し、講義内容の検討に役立っている。

【資料2-2-1】 商学研究科における修了者数の推移

| | 平成23年度 | 平成24年度 | 平成25年度 | 平成26年度 | 平成27年度 |
|----------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 修士課程 | | | | | |
| 経営学修士コース | 90 | 82 | 83 | 90 | 93 |
| 研究者養成コース | 20 | 34 | 23 | 22 | 37 |
| 博士後期課程 | 9 | 11 | 8 | 13 | 15 |

【資料2-2-2】 博士後期課程の大学院生による研究成果

| | 平成25年度 | 平成26年度 | 合計 | 参考 | | |
|---------------|--------|--------|----|--------|--------|----|
| | | | | 平成18年度 | 平成19年度 | 合計 |
| (1) 査読付雑誌に掲載さ | 10 | 21 | 31 | 11 | 7 | 18 |

| | | | | | | |
|---------------------|----|----|----|----|----|----|
| れた日本語論文 | | | | | | |
| (2) 査読付雑誌に掲載された英語論文 | 3 | 3 | 6 | 3 | 0 | 3 |
| (3) 書籍の一部として執筆された論文 | 7 | 3 | 10 | 11 | 1 | 12 |
| (4) 査読なしの雑誌掲載論文 | 10 | 16 | 26 | 11 | 13 | 24 |
| (5) 学会での報告 | 42 | 52 | 94 | 10 | 16 | 26 |
| (6) 学会以外での報告 | 2 | 7 | 9 | 5 | 3 | 8 |

注：参考部分のデータは、第Ⅰ期の現況調査表掲載分

(水準) 期待される水準を上回る
(判断理由)

修士号並びに博士号の授与数、研究者養成コースの学生の研究業績等の状況により、期待する学習成果が上がっていると判断される。特に、かつては極めて稀であった、大学院生による査読付英語論文が複数採択されている状況は、博士後期課程に在籍する学生の国際的な志向性が、本研究科においても着実に高まっていることを示唆している。

これらのことから、期待される水準を上回っていると判断する。

観点 進路・就職の状況

(観点到に係る状況)

本研究科では、修了生の進路調査を継続的に行っており、在学中の学業の成果を把握するために役立てている。

経営学修士コースでは、修了後の進路先として、コンサルティング業界や金融業界、IT業界をはじめとする、同コースで学んだ成果を相対的に活かしやすい業種を選ぶ場合が近年増えているが、製造業やサービス業といった一般の事業会社へも相当数就職している。また、最近では、修了直後に起業をする場合も見受けられるようになっている。平成26年度修了者85人の進路は資料2-2-3のとおりである。

研究者養成コースのうち、修士課程では、博士後期課程への進学を前提としたカリキュラムをとっているが、例年一定数の修了者は企業等に就職している。平成26年度修了者27人の進路は資料2-2-4のとおりである。

博士後期課程では、修了ないし単位修得後退学後には、大学教員を中心とする研究職に就くことが想定されており、実際に研究職に就く場合が多い。平成26年度の修了者13人、単位修得退学者11人の進路は、それぞれ資料2-2-5のとおりである。なお、本学において任期付の特任講師・助教に就任した場合には、通常は1～2年のうちに、他大学の教員として採用されている。

【資料2-2-3】 経営学修士コース 平成26年度修了者 85人の進路 (平成27年1月現在)

| | |
|------------|-----|
| コンサルティング | 15人 |
| 金融 | 11人 |
| IT | 6人 |
| 製造業 | 15人 |
| サービス・流通・商社 | 12人 |
| 官公庁 | 7人 |

| |
|--------------|
| 起業 3人 |
| 帰国して就職活動 10人 |
| 未定 6人 |

※派遣学生が派遣元の企業・団体に復職する場合も含む

【資料2-2-4】 研究者養成コース 平成26年度修了者 27人の進路（平成27年1月現在）

| |
|--------------|
| 博士後期課程進学 14人 |
| 金融 3人 |
| シンクタンク・IT 3人 |
| 商社・流通 2人 |
| 未定 5人 |

【資料2-2-5】 博士後期課程 平成26年度修了者13人、単位修得退学者11人の進路（平成27年1月現在）

| 修了者 | 単位修得退学者 |
|--------------|--------------|
| 他大学教員 7人 | 他大学教員 2人 |
| 本学特任講師・助教 4人 | 本学特任講師・助教 4人 |
| 一般企業等 2人 | 一般企業等 3人 |
| | 未定 2人 |

（水準） 期待される水準にある

（判断理由）

経営学修士コースでは、ディプロマ・ポリシーで掲げるような、企業経営に関わる高度な専門知識と分析能力を活かす可能性が高い就職先が相当数を占めており、良好な状況にあるといえる。

研究者養成コースにおいても、博士後期課程を終えた段階で、同コースで中心的に育成されるべき研究職に実際に就くことができる人の割合は、一般的な文系の大学院と比較して高い状況にあるといえる。

これらのことから、期待される水準にあると判断する。

Ⅲ 「質の向上度」の分析

(1) 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

事例1 収容定員の変更と志願者の属性に対応した入試の多様化

増大する経営学修士コースへのニーズに対応するため、1学年あたりの博士後期課程の定員を削減して、修士課程の定員として振り替えた。また、それに伴い、経営学修士コースを中心として、志願者の属性にあわせた入試制度の多様化を実施した。そこで主として対象としたのは、企業経営について高度な知識を獲得したい外国人留学生と社会人である。

入試制度の変更によって生じた最も大きな影響は、外国人志願者の増大である。また、社会人特別選考においても、堅調に推移している【資料2-3-1】。

事例2 経営学修士コースにおける国際化の推進に向けたカリキュラムの改革

経営学修士コースにおいて、受講者の多様化への対応と学生自身の国際化促進に向けたカリキュラム改革を継続的に実施してきた。その1つが、「留学生プログラム」であり、日本語による高度なマネジメント教育を円滑に受けることができるように設計されている。また、ベトナムからの留学生には、専用の給付型奨学金制度を新たに開設している。留学生の適応・学習プロセスを支援するためのこれらの方策は、多くの志願者を外国人特別選考で集める要因の1つとなっている。

事例3 経営学修士コースにおける英語による科目の拡充

平成24年度から、欧米の有力大学でPh.D.を取得した外国人の専任教員を順次採用して、英語によるマネジメント教育を経営学修士コースで本格的に開始した。平成27年度には、商学研究科の主要4領域（経営、会計、金融、マーケティング）を網羅して、演習と日本語教育科目を除く科目の2割程度を占めるまで拡大している。英語による専門科目は、日本人学生と外国人留学生の双方が選択科目として受講しており、受講者がマネジメントに関する国際的な視点を獲得する貴重な機会となっている。

これらの取組により、学生の多様性と国際志向性の増大をはじめとして、社会からの要請に応えることで、大きな変化が見られることから、第1期中期目標期間終了時点の教育水準と比べて、教育活動の状況の質が向上したと判断する。

【資料2-3-1】 経営学修士コースの外国人特別選考及び社会人特別選考の志願者数

| | 外国人特別選考 | 社会人特別選考 |
|--------|---------|---------|
| 平成24年度 | 21 | — |
| 平成25年度 | 75 | 20 |
| 平成26年度 | 106 | 28 |
| 平成27年度 | 96 | 29 |

(2) 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

事例1 博士後期課程における研究活動の活発化

大学院における教育の成果として変化があったといえるものの1つは、博士後期課程における研究業績である。

資料2-2-2（2-5ページ（再掲））のとおり、第1期の現況調査表で示された状況と比べると、研究というものの特性から年によって変動はあるものの、査読付論文（日本語並びに英語）、査読のない論文、学会報告といった項目で、2年間の合計は増大している。なかでも顕著な変化があったといえるのは、査読付

論文数と学会報告の件数である。これらは研究活動の中核であることから、極めて望ましい状況にあるといえる。

さらに、学会報告については、件数が3倍以上に増加しているだけでなく、海外学会での発表が大幅に増えている。この点は、平成20年度から24年度にかけて実施されたグローバルCOEプログラムにおいて、博士後期課程の大学院生を含めた研究の国際化を推進し、平成26年度以降は、同プログラムの制度を引き継ぐ形で、海外での学会発表時における渡航費補助と英語論文の校閲料補助を研究科独自の制度として開設してきたことなどが、大きく寄与している。

以上のような点からは、学会での発表経験をもとに、国際的にも活躍する研究者が育つ素地が、商学研究科には着実に作られつつあるといえる。

正誤表 学部・研究科等の現況調査表（教育）

一橋大学商学研究科

| | 頁数・行数等 | 誤 | 正 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------------------|--------------------|--|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|------|-------------|-------------|----|----------------------|----|--------------|----|-----------|----|-----------|---------------------|--------------|----|----|----------|-----------|----------|---------------------|---|-----------|----|-----------|----------|--|-----------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-----------|------------|----|----|----|-----------|--------------|-----------|--------------|----|-----------|----------|--------------|----------|----------|--|-----------|-------------|-------------|----|-----------|---|----|-------------|-------------|----|----------------------|----|----|----|----------|-----------|-----------|-------------------------|---|---|---|----------|----------|----------|---------------------|---|---|----|----------|----------|----------|-----------------|----|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|----|----|----|-----------|-----------|-----------|--------------|---|----------|-----------|----------|-----------|-----------|
| 1 | 2-5 頁・ 資料 2-2-1 | <p>【資料 2-2-1】 商学研究科における修了者数の推移</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成 23 年度</th> <th>平成 24 年度</th> <th>平成 25 年度</th> <th>平成 26 年度</th> <th>平成 27 年度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>修士課程</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td> 経営学修 士コース</td> <td>90</td> <td>82</td> <td>83</td> <td><u>90</u></td> <td>93</td> </tr> <tr> <td> 研究者養 成コース</td> <td>20</td> <td>34</td> <td>23</td> <td><u>22</u></td> <td>37</td> </tr> <tr> <td>博士後期課程</td> <td>9</td> <td><u>11</u></td> <td>8</td> <td>13</td> <td>15</td> </tr> </tbody> </table> | | 平成 23 年度 | 平成 24 年度 | 平成 25 年度 | 平成 26 年度 | 平成 27 年度 | 修士課程 | | | | | | 経営学修 士コース | 90 | 82 | 83 | <u>90</u> | 93 | 研究者養 成コース | 20 | 34 | 23 | <u>22</u> | 37 | 博士後期課程 | 9 | <u>11</u> | 8 | 13 | 15 | <p>【資料 2-2-1】 商学研究科における修了者数の推移</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成 23 年度</th> <th>平成 24 年度</th> <th>平成 25 年度</th> <th>平成 26 年度</th> <th>平成 27 年度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>修士課程</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td> 経営学修 士コース</td> <td>90</td> <td>82</td> <td>83</td> <td><u>85</u></td> <td>93</td> </tr> <tr> <td> 研究者養 成コース</td> <td>20</td> <td>34</td> <td>23</td> <td><u>27</u></td> <td>37</td> </tr> <tr> <td>博士後期課程</td> <td>9</td> <td><u>10</u></td> <td>8</td> <td>13</td> <td>15</td> </tr> </tbody> </table> | | 平成 23 年度 | 平成 24 年度 | 平成 25 年度 | 平成 26 年度 | 平成 27 年度 | 修士課程 | | | | | | 経営学修 士コース | 90 | 82 | 83 | <u>85</u> | 93 | 研究者養 成コース | 20 | 34 | 23 | <u>27</u> | 37 | 博士後期課程 | 9 | <u>10</u> | 8 | 13 | 15 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 平成 23 年度 | 平成 24 年度 | 平成 25 年度 | 平成 26 年度 | 平成 27 年度 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 修士課程 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 経営学修 士コース | 90 | 82 | 83 | <u>90</u> | 93 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 研究者養 成コース | 20 | 34 | 23 | <u>22</u> | 37 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 博士後期課程 | 9 | <u>11</u> | 8 | 13 | 15 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 平成 23 年度 | 平成 24 年度 | 平成 25 年度 | 平成 26 年度 | 平成 27 年度 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 修士課程 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 経営学修 士コース | 90 | 82 | 83 | <u>85</u> | 93 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 研究者養 成コース | 20 | 34 | 23 | <u>27</u> | 37 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 博士後期課程 | 9 | <u>10</u> | 8 | 13 | 15 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2 | 2-6 頁・ 資料 2-2-2 | <p>【資料 2-2-2】 博士後期課程の大学院生による研究成果</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2"></th> <th rowspan="2">平成 25 年度</th> <th rowspan="2">平成 26 年度</th> <th rowspan="2">合計</th> <th colspan="3">参考</th> </tr> <tr> <th>平成 18 年度</th> <th>平成 19 年度</th> <th>合計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>(1) 査読付雑誌に掲載された日本語論文</td> <td>10</td> <td>21</td> <td>31</td> <td><u>11</u></td> <td>7</td> <td><u>18</u></td> </tr> <tr> <td>(2) 査読付雑誌に掲載された英語論文</td> <td>3</td> <td>3</td> <td>6</td> <td><u>3</u></td> <td><u>0</u></td> <td><u>3</u></td> </tr> <tr> <td>(3) 書籍の一部として執筆された論文</td> <td>7</td> <td>3</td> <td>10</td> <td><u>11</u></td> <td><u>1</u></td> <td><u>12</u></td> </tr> <tr> <td>(4) 査読なしの雑誌掲載論文</td> <td>10</td> <td><u>16</u></td> <td><u>26</u></td> <td><u>11</u></td> <td><u>13</u></td> <td><u>24</u></td> </tr> <tr> <td>(5) 学会での報告</td> <td>42</td> <td>52</td> <td>94</td> <td><u>10</u></td> <td><u>16</u></td> <td><u>26</u></td> </tr> <tr> <td>(6) 学会以外での報告</td> <td>2</td> <td><u>7</u></td> <td><u>9</u></td> <td><u>5</u></td> <td><u>3</u></td> <td><u>8</u></td> </tr> </tbody> </table> <p>注：参考部分のデータは、第 I 期の現況調査表掲載分</p> | | 平成 25 年度 | 平成 26 年度 | 合計 | 参考 | | | 平成 18 年度 | 平成 19 年度 | 合計 | (1) 査読付雑誌に掲載された日本語論文 | 10 | 21 | 31 | <u>11</u> | 7 | <u>18</u> | (2) 査読付雑誌に掲載された英語論文 | 3 | 3 | 6 | <u>3</u> | <u>0</u> | <u>3</u> | (3) 書籍の一部として執筆された論文 | 7 | 3 | 10 | <u>11</u> | <u>1</u> | <u>12</u> | (4) 査読なしの雑誌掲載論文 | 10 | <u>16</u> | <u>26</u> | <u>11</u> | <u>13</u> | <u>24</u> | (5) 学会での報告 | 42 | 52 | 94 | <u>10</u> | <u>16</u> | <u>26</u> | (6) 学会以外での報告 | 2 | <u>7</u> | <u>9</u> | <u>5</u> | <u>3</u> | <u>8</u> | <p>【資料 2-2-2】 博士後期課程の大学院生による研究成果</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2"></th> <th rowspan="2">平成 25 年度</th> <th rowspan="2">平成 26 年度</th> <th rowspan="2">合計</th> <th colspan="3">参考</th> </tr> <tr> <th>平成 18 年度</th> <th>平成 19 年度</th> <th>合計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>(1) 査読付雑誌に掲載された日本語論文</td> <td>10</td> <td>21</td> <td>31</td> <td><u>7</u></td> <td><u>16</u></td> <td><u>23</u></td> </tr> <tr> <td>(2) 査読付雑誌に掲載された日本語以外の論文</td> <td>3</td> <td>3</td> <td>6</td> <td><u>0</u></td> <td><u>2</u></td> <td><u>2</u></td> </tr> <tr> <td>(3) 書籍の一部として執筆された論文</td> <td>7</td> <td>3</td> <td>10</td> <td><u>1</u></td> <td><u>3</u></td> <td><u>4</u></td> </tr> <tr> <td>(4) 査読なしの雑誌掲載論文</td> <td>10</td> <td><u>11</u></td> <td><u>21</u></td> <td><u>13</u></td> <td><u>15</u></td> <td><u>28</u></td> </tr> <tr> <td>(5) 学会での報告</td> <td>42</td> <td>52</td> <td>94</td> <td><u>15</u></td> <td><u>25</u></td> <td><u>40</u></td> </tr> <tr> <td>(6) 学会以外での報告</td> <td>2</td> <td><u>8</u></td> <td><u>10</u></td> <td><u>3</u></td> <td><u>13</u></td> <td><u>16</u></td> </tr> </tbody> </table> <p>注：参考部分のデータは、第 I 期の現況調査表掲載分</p> | | 平成 25 年度 | 平成 26 年度 | 合計 | 参考 | | | 平成 18 年度 | 平成 19 年度 | 合計 | (1) 査読付雑誌に掲載された日本語論文 | 10 | 21 | 31 | <u>7</u> | <u>16</u> | <u>23</u> | (2) 査読付雑誌に掲載された日本語以外の論文 | 3 | 3 | 6 | <u>0</u> | <u>2</u> | <u>2</u> | (3) 書籍の一部として執筆された論文 | 7 | 3 | 10 | <u>1</u> | <u>3</u> | <u>4</u> | (4) 査読なしの雑誌掲載論文 | 10 | <u>11</u> | <u>21</u> | <u>13</u> | <u>15</u> | <u>28</u> | (5) 学会での報告 | 42 | 52 | 94 | <u>15</u> | <u>25</u> | <u>40</u> | (6) 学会以外での報告 | 2 | <u>8</u> | <u>10</u> | <u>3</u> | <u>13</u> | <u>16</u> |
| | 平成 25 年度 | 平成 26 年度 | | | | | 合計 | 参考 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | 平成 18 年度 | 平成 19 年度 | 合計 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| (1) 査読付雑誌に掲載された日本語論文 | 10 | 21 | 31 | <u>11</u> | 7 | <u>18</u> | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| (2) 査読付雑誌に掲載された英語論文 | 3 | 3 | 6 | <u>3</u> | <u>0</u> | <u>3</u> | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| (3) 書籍の一部として執筆された論文 | 7 | 3 | 10 | <u>11</u> | <u>1</u> | <u>12</u> | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| (4) 査読なしの雑誌掲載論文 | 10 | <u>16</u> | <u>26</u> | <u>11</u> | <u>13</u> | <u>24</u> | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| (5) 学会での報告 | 42 | 52 | 94 | <u>10</u> | <u>16</u> | <u>26</u> | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| (6) 学会以外での報告 | 2 | <u>7</u> | <u>9</u> | <u>5</u> | <u>3</u> | <u>8</u> | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 平成 25 年度 | 平成 26 年度 | 合計 | 参考 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | 平成 18 年度 | 平成 19 年度 | 合計 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| (1) 査読付雑誌に掲載された日本語論文 | 10 | 21 | 31 | <u>7</u> | <u>16</u> | <u>23</u> | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| (2) 査読付雑誌に掲載された日本語以外の論文 | 3 | 3 | 6 | <u>0</u> | <u>2</u> | <u>2</u> | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| (3) 書籍の一部として執筆された論文 | 7 | 3 | 10 | <u>1</u> | <u>3</u> | <u>4</u> | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| (4) 査読なしの雑誌掲載論文 | 10 | <u>11</u> | <u>21</u> | <u>13</u> | <u>15</u> | <u>28</u> | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| (5) 学会での報告 | 42 | 52 | 94 | <u>15</u> | <u>25</u> | <u>40</u> | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| (6) 学会以外での報告 | 2 | <u>8</u> | <u>10</u> | <u>3</u> | <u>13</u> | <u>16</u> | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |